角川文庫
—755—

武蔵野夫人

大岡昇平

角川書店

昭和二十九年四月五日　初版発行
昭和四十四年三月三十日　二十五版発行
昭和四十五年四月二十日　改版初版発行

定価は、帯・カバーに明記してあります

著作者　大岡昇平
発行者　角川源義
印刷者　村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

角川文庫

武蔵野夫人

東京都千代田区富士見二ノ十三
〒一〇二　振替東京一九五二〇八
株式会社角川書店
電話東京(263)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　本製・旭印刷

武蔵野夫人

大岡昇平

角川文庫
755

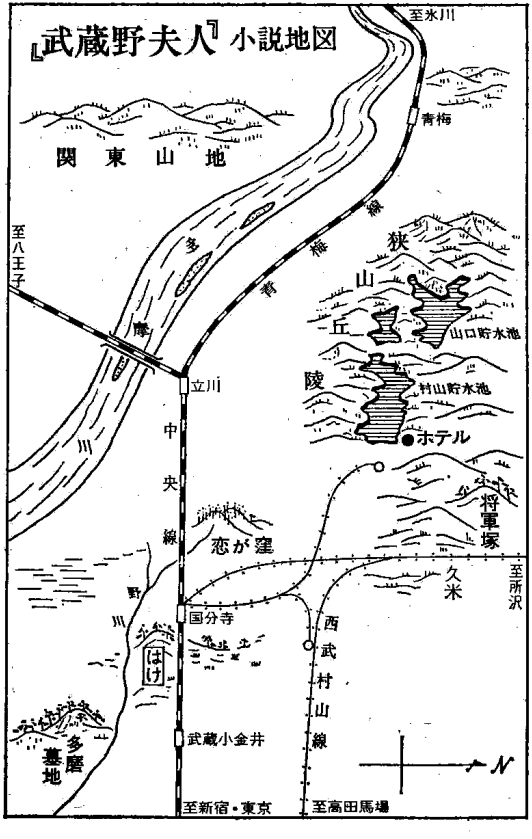
本書は、著者の了解を得て、現代表記法により、原文を新字・新かなづかいにしたほか、漢字の一部をひらがなに改めた。

（編集部）

目次

第一章　「はけ」の人々　五
第二章　復員者　一一
第三章　姦通の条件　一四
第四章　恋が窪　一七
第五章　蝶の飛翔について　二四
第六章　真夏の夜の夢　二七
第七章　湖の涯　二四
第八章　狭山　二五
第九章　別離　二六
第十章　夫の権利　二八
第十一章　カメラの真実　二二
第十二章　離婚の理由　二五
第十三章　秋　二七
第十四章　心　二四
解説　伊藤整　二七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton


『武蔵野夫人』小説地図
関東山地
至氷川
青梅
至八王子
多摩川
青梅線
狭山丘陵
山口貯水池
村山貯水池
ホテル
立川
中央線
恋が窪
将軍塚
久米
至所沢
国分寺
西武村山線
はけ
武蔵小金井
多磨墓地
至新宿・東京
至高田馬場
N

第一章　「はけ」の人々

土地の人は何故そこが「はけ」と呼ばれるかを知らない。「はけ」の荻野長作といえば、この辺の農家に多い荻野姓の中でも、いちだんと古い家柄とされているが、人々は単にその長作の家のある高みが「はけ」なのだと思っている。

中央線国分寺駅と小金井駅の中間、線路から平坦な畠中の道を二丁南へ行くと、道は突然下りとなる。「野川」と呼ばれる一つの小川の流域がそこに開けているが、流れの細いわりに斜面の高いのは、これがかつて古い地質時代に関東山地から流出して、北は入間川、荒川、東は東京湾、南は現在の多摩川で限られた広い武蔵野台地を沈澱させた古代多摩川が、しだいに西南に移って行った跡で、斜面はその途中作った最も古い段丘の一つだからである。

狭い水田を発達させた野川の対岸はまたゆるやかに高まって楯状の台地となり、松や桑や工場を乗せて府中まで来ると、第二の段丘となって現在の多摩川の流域に下りている。

野川はつまり古代多摩川の三角洲、武蔵野を縦に断った「古延長川」の一つである。段丘は三鷹深大寺調布を経て喜多見の上で多摩の流域に出、それから下は直接神奈川の多摩丘陵と相対しつつ蜿々六郷に到っている。

樹の多いこの斜面でもひときわ高く聳え　欅や樫の大木は古代武蔵原生林の名残りであるが、

「はけ」の長作の家もそういう欅の一本を持っていて、遠くからでもすぐわかる。斜面の裾を縫う道からその欅の横を石段で上る小さな高みが、一帯より少し出張っているところから、「はけ」とは「鼻」の訛だとか、「端」の意味だとかいう人もあるが、どうやら「はけ」はすなわち、「峡」にほかならず、長作の家よりは、むしろその西北から道に流れ出る水を溯って斜面深く喰い込んだ、一つの窪地を指すものらしい。

水は窪地の奥がしだいに高まり、低い崖となって尽きるところから湧いている。武蔵野の表面を蔽う壗埵、つまり赤土の層に接した砂礫層が露出し、きれいな地下水が這い出るように湧き、すぐせせらぎを立てる流れとなって落ちて行く。長作の家では流れが下の道を横切るところに小さな溜りを作り、畠の物を洗ったりなぞする。

古代武蔵野が鬱蒼たる原生林に蔽われていたころ、また降っては広漠たる荒野と化して、渇いた旅人が斃死したころも、斜面一帯はこの豊かな湧き水のために、常に人に住われていた。長作の先祖が初めここに住みついたのも、明らかにこの水のためであって、「はけの荻野」と呼ばれたのもそのためであろうが、今は鑿井技術が発達して到るところ井戸があり、湧水の必要は薄れたから、現在長作の家が建っている日当りのいい高みが「はけ」だと人は思っているわけである。

もっとも人がこの湧水を忘れたのは、あながち生活の原因からばかりではない。長作の家で使っている水溜から西へ十間ばかり、つまりこの窪地の正面を蔽う広さの全部が、今は生垣によって占められ、洒落た冠木門の中には梅、木犀、泰山木等の花樹が、四季とりどりの花を咲かせる。つまりこれは近ごろとみにこの辺に増えた都会人の住宅の一つであって、道行く人はこの垣の中

に、かつてこの土地の繁栄の条件であった湧水があろうなどとは思わない。

三十年前湧水を含む窪地一帯の約千坪の地所は、ほとんどただのような値段で東京の官吏宮地信三郎の手に移った。道傍の水溜における水の使用と、現在の「はけ」の地所に新しい井戸を掘る費用の負担とは、長作の先代が譲渡に際してきわどくつけた条件であったが、それでも先代は死ぬまで損をした損をしたとこぼしていた。というのは土地を手離して五年経つと、ここから徒歩十五分のところに小金井駅ができ、地価が三倍になったからである。

鉄道省事務官の宮地はむろん駅の新設をあらかじめ知っていた。しかし、彼がここに選んだのはあながち打算のためばかりではない。彼は実際「はけ」が気に入ったのである。水があり日溜りになっているところも気に入ったが、何よりも気に入ったのは富士が見えることであった。

富士は見晴らす多摩の流域と相模野の向うに、岬のように突き出した丹沢山塊の上に小さく載っていた。その四季と天候による変貌は彼のいつも見倦きぬ眺めであった。樹木を愛した彼はもともと樹の多いこの地面に、さらにさまざまの珍しい観賞用の樹木を植えたが、泉と同じ高さに崖を切り開いて建てた家の傍では、樹をことさらに軒に近づけ、葉によって富士の眺めが遮られないようにした。

宮地信三郎がこれほど富士を愛したのは、彼がこの山を見て幼時を過したからである。もと旗本であった彼の家が瓦解後静岡に移って間もなく彼は生れた。没落した侯家の士族というハンディキャップの下に彼が東京へ出て明治政府に職を得たのは、幾多の苦難を経た後であった。彼の五人の兄弟（彼はその名の示す通りその三男であった）は明治初期の混乱の裡にほとんど四散し、

大正時代なお往来しているのは軍人として参謀大佐まで昇った末弟の東吾だけであったが、その弟も日本降伏の翌日拳銃自殺を遂げてしまって、かつて五百石取りの旗本の家であった宮地家も、今は彼一人になってしまった。

彼は自殺した弟を馬鹿だ、といっていた。彼によれば今度の敗戦は明治の足軽政府の猪突主義の当然の帰結であり、それに殉ずるなぞもってのほかなのであった。彼は勝海舟の愛読者であり、好んで徳川末期、中央の才人によって起草された大名会議案の進歩性を誇張して、訪問客を煙に巻いた。日本はやっと神君以来の合理主義に帰るのだ、と彼はいっていた。

在官当時から彼は一種の偏屈者として通っていたが、自分の仕える政府を侮っていただけに、利殖の道はうまかった。大正の末停年で官を退くまでに、すでに相当の産を作っていたが、退職後も縁故を辿って静岡県のある私鉄の重役に収まり、二年の間にさらに産を殖やすと、あらかじめ別荘として建ててあった「はけ」の家に引っ込んでしまった。

こうして彼の生涯はある程度の幸福に達していた。ただ子供運はよくなかった。同じ静岡県の士族から貰った妻の民子との間に、二男一女が生れたが、男はいずれも早逝し、末娘の道子だけしか残らなかった。それも次男の死ぬ前に片付き子供がなかったので、結局宮地家には跡取りが絶えることになったが、一種の冒険的立身の生涯を送って来た彼は、それをあまり苦に病まなかった。

「はけ」の家を建てるために崖を崩した時、横穴が現われ人骨があった。民子はそれを不吉とし、工事を中止して他に土地を探すことを主張したが、彼はきかなかった。「墓は古代人のもの

で、ここが人の住むに適するという証拠だ」と彼はいった。しかし妻はやはり男二人が夭折したのはひとえに墓の祟りだ、いずれ宮地家は死に絶えると固く信じながら彼女自身も昭和二十年空襲の最中に死んでいった。

そのころは娘の道子夫婦もこの家に同居していた。夫の秋山忠雄は東京のある私立大学のフランス語の教師で道子を愛して求婚したのであったが、彼女を貰ったころ宮地の家が羽振りがよく、彼が何となく養子のように人に見られたことを、快からず思っていた。で、空襲が始まると幾度か養父に一緒に暮すようにすすめられながら、何とかかんとかいって渋っていたが、五月渋谷の家が焼けるに及んで、やっと「はけ」の家へ来ることに同意した。

道子は父に鍾愛されていた。男の兄弟と一緒に育って、幼時はむしろ強情ではねっかえりの方であったが、物心つくころから急におとなしくなった。少しお凸で顎が張り、せっかくの瓜実顔はなんとなく空豆に似ていたので、家でいつも「そらまめさん」と呼ばれていたが、当人はむしろそれが得意であった。遠い四国の高等学校に入った長兄に出す手紙には、いつも署名のかわりに空豆の絵を描いた。

しかしちょうど彼女がおとなしくなった十四、五のころから、だんだん形のいい鼻がせり出して来て、どうして「そらまめさん」どころではなく、母親譲りの白い皮膚と相俟って、なかなかの美貌を表わすようになった。女学校の上級生や近所の中学生からよく手紙が来たが、彼女はいつも開封しないで、母親に渡してしまうので、母親はいちいち学校へ抗議に行かねばならぬのをかえって面倒がった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「あなたに隙があるからですよ」と母親は叱ったが、道子はただびっくりしたような顔をして叱り手を見詰めるばかりなので、母親はかえって安心した。

彼女はそのかわり早くから八歳年上の長兄の俊一に熱中した。俊一は何故か父親の衒学的シニスムに反抗し、若くからフランスの近代文学、ことにランボオに心酔して坊ちゃんふうの漂浪の生活を送った。彼は丈が高く、小さな卵形の顔が長い首の上にちょこんと載って美しかった。彼の言葉は彼女にとって金科玉条で、自分の生活の細目にいたるまで何でも彼の指図を仰ぎ、盆暮に方々から貰う小遣もみんな彼に送ってしまった。

その兄が乱暴な生活のため肺を病んで二十四歳で死ぬと、今度は次兄の慶次が熱中の対象になった。彼は作曲家希望で少年の時からピアノを弾いた。彼女も一緒に習わされたが、彼女がさっぱり進歩しないのに反して、慶次が易々とむずかしいオーケストレーションを鍵盤の上で組み立てて行くのを、彼女はほとんど渇仰の眼で眺めた。その兄もやがて長兄と同じ二十四歳の若さで、おそらく長兄から感染した肺結核で死んで行った。彼女だけ感染の徴候を示さないのはちょっと不思議であったが、父に「それはお前の顎のせいだよ」といわれると、たしかにそうだと思われて来た。死んだ長兄に「道子の顔の造作はみんな優しいが、顎だけちょっと野蛮だな」といわれたことがあったからである。

女子大に在学中を秋山に望まれて十八歳で結婚すると、彼女はむろん夫を溺愛した。しかし三年たって次兄が死んだ時、何だか自分が熱中する人はみな死ぬような気がして、夫をあまり愛してはいけないのではないか、とふと思った。彼女がこう思ったのと、夫が愛撫の際彼女の耳を噛

む癖が妙に気になり出したのが、同時であったのはちょっと興味がある。

彼女はますます美しくなったが、その容姿の難をいえば少し胴が長すぎることであった。母親は彼女になるべく洋装はさせなかったが、着物を着せても「どうも帯の結びようがないね」とこぼした。しかし父親は「なに構うものか、元禄時代は胴の長いのが美人の条件とされていたものだ」といって笑っていた。

秋山の耳を噛む癖を道子が気にし出したころ、父親はまたこの感想を道子と差し向いで繰り返したことがある。その時彼は娘ももう一人前の女だから構わないだろうと思い、胴の長い女の閨房的魅力について、ちょっと露骨な冗談を付け加えたが、じっと彼を見詰める娘の大きな眼が、みるみる涙でいっぱいになって行くのを見て、彼はびっくりしてしまった。

よくもののわかった人ではあったが、明治の書生として吉原の小店で常連であった宮地老人はこういうことをごく簡単に考えていた。妻を女主人として尊敬することは知っていたが、出張先などで到るところ不実を犯し、それをべつに悪いこととも思っていなかった。だから娘の涙にただ女の虚栄心を見たにすぎず、その後に隠された、女心の微妙な傷を推察することができなかった。

事実は道子は少し前からいわゆる女の務めか苦痛になっていたのである。夫の秋山はべつに好色漢ではなかったが、妻の体に馴れるに従って、妻の感傷的な愛情に肉体的動作でしか応えなくなった。無心に結ばれた夫婦の肉体的接触の習慣の間に、男の習性によって自然に生じる偏差であるが、女は通常なかなか男と調子を合わせることができないものである。そこで危機は多く男、

の側の浮気という形で現われる。

秋山が道子と結婚したのは彼の三十の時でむしろ晩婚であったが、それまで彼は女を知らなかった。埼玉県の貧農の家に生れた彼は、少年の時から出世のことより頭になかった。生来おとなしく意気地なしの彼は、学問による道を選ぶほかはなかったが、文学を志したのは、たとえば数学のような確実な学問で衆に抜きんでるには頭が悪かったからである。フランス文学が流行の端緒についたころであった。彼が専門としたのがスタンダールであったのは、いくぶんシュリアン・ソレルの出世主義に共鳴したところがあったからでもあるが、主な動機は当時他の作家はたいてい先輩たちによって分割し尽されていて、少し時代の古いこの作家より残されていなかったからである。しかし彼の時々専門雑誌などへ発表する論文は、要するに排他的熱狂と偏見に満ちたもので、とうてい彼の一枚看板を流行に押し出す力はなかった。

彼は憂鬱にフランス語教師の職に満足しなければならなかったが、そのスタンタール耽読から、彼はこの十九世紀サロンの遊弋者の恋愛修業や姦通の趣味についてはなはだ熱っぽい影響を受けた。彼の教師としての経歴も、道子との平穏な結婚生活も、この西欧の大エゴチストの冒険と何の関係もなかったにもかかわらず、『恋愛論』や日記等に現われた、シニックな恋愛術に彼は憧れた。

前に書いた道子との危機に、こういう彼の奇妙な憧憬がなんらかの役割を果していなかったとはいえない。その時彼が娼婦のところへ行かなかったのは臆病からであった。彼は花柳病が怖かったのである。もともと彼が三十まで童貞であったのも主としてこの理由によった。

死んだ次兄は秋山を嫌っていた。両親もこの結婚にあまり乗気ではなかったが、ただ道子が彼女の前に現われた最初の候補者に夢中になってしまったのである。秋山は色が黒く痩せて、ひどい近眼であったにもかかわらず、道子にはなぜか愛すべき男と映った。彼女のような熱中する癖のある心には、いつも対象が必要であった。

危機は夫の臆病と妻の側の忍耐によってひとまず回避された。それから戦争のはげしさが二人を新しく結び合わせた。秋山は貧弱な体軀のため兵役は免かれたが、学生の不断の勤労奉仕の監督として夏休みも駆り出され、連日の職員会議にぐったり疲れて帰って来た。道子も防火訓練やバケツリレーに体力を使い果して、心は留守であった。戦争とそれに続いた生活の逼迫はある夫婦を別れさせたが、ある夫婦はかえって固く結びつけている。

こういう二人の間にまたひびを入れたのが、宮地老人と同居したことであったのは否めない。老人はもう七十五であった。空襲警報が鳴っても彼はけっして退避しなかった。「とにかく私はここにおりますから」といって、机の前を動かなかった。秋山はやむを得ず「ではお先に」といって道子とともに押入へ入るのだが、道子が父と一緒に室にいたがるのをよく押入の暗がりの中で叱った。

日本が降伏し進駐軍が附近の飛行場に降りるというわさが飛んだ時、当時の軍の一部が希望者に配布した青酸加里が、一家の話題となったことがある。秋山はさすがに外国文学をやっただけに、米兵の礼節を信じていたから、軍の迷妄を一笑に附したが、道子は「でも持っていた方が安心ね」といった。昔気質の宮地老人は娘を支持した。秋山は焦立って「貰うんなら貰っといて

もいいが、お前が飲んでも俺はごめんだぜ」といった。結局教師仲間から手に入れた催眠剤を妻に与えることで折合ったが、「俺はごめんだぜ」の一句は道子を傷けた。

終戦間際から食糧で秋山の郷里の農家が役に立ち、彼は初めて宮地の家に何かをしてやれる喜びを持ったが、さらに戦後不意に来た出版景気と奇妙なスタンダールの流行から、彼が昔やっておいた翻訳が方々から重版され、急に印税が入るようになった。宮地老人の恩給は彼自身のためにひと月分の闇米を買うにも足らず、その所有する株券も反古どころか逆に出費さえかけるようになったのに引きかえ、秋山の取る新円の一家の経済における比例は増加した。彼は傲慢になった。

彼は道子がますます自分と固く結ばれていると自惚れたが、何ぞ知らん、生活が楽になるとともに、戦争中辛くも二人を繋いでいた唯一の心の紐帯は失われていたのである。

しかし夫婦は不思議なものである。道子は今では夫に愛情こそ持っていなかったが、結婚当初宮地の家の人々が夫に示したうとうとしい態度に対する反撥と名のつくものから得た、庇護の習慣だけは残っていた。そしてそれは秋山が事実上一家の支柱となった今になっても変らなかった。それが今では秋山を焦立たせた。

宮地老人は、なかなかへこたれなかった。彼は物を売った。入れておくものの少くなった物置を売り、愛する樹木を売った。そして自分の生活を賄うだけのものは毎月欠かさず道子に渡した。さらに裏山の松を次々と倒して毎日風呂をわかした。松の大木の一つで、彼はあらかじめ自分の寝棺を作らせたが、三分という厚さでは重くてしようがない、と秋山は変な取り越し苦労をした。

宮地老人の物置や樹の買主は赤の他人ではなかった。すなわち一年前から「はけ」の長作の家の向う栗林を隔てた地続きに移って来ていた、甥の大野英治に売ったのである。

大野は老人の亡妻民子の妹の子で、やはり静岡へ移住した徳川の臣の出てある。ただし宮地兄弟が主に官吏や軍人の道を選んだのに反し、大野の家は士族の商法が一時意外に当ったものである。英治の父は横浜で生糸に手をつけ、相当派手にやっていたが、大正末期の財界の変動で一挙に産を失って郷里に逼塞した。当時九歳の英治を頭に三人の子があり、英治はしばらく宮地の家から東京の中学へ通っていたことがあったが、やがてもと父の店の者で、奇妙な偶然から大正八年の暴落以来、とんとん調子で株で儲けた男の世話で、慶応の経済学部を出ると、やはりその男が買収した化学工場の社員となった。工場は戦争中軍の下請工場として発展した。そして英治のお坊ちゃんふうの猪突主義は戦時下の散漫な営業政策と調子が合い、満洲や華北に子会社を二つ三つ作って廻った後で、府中附近のかなり重要な工場を任せられるまでになった。終戦とともに魚油仲介業者と組んで、彼はそれを素早く石鹸工場に切り替えた。

「はけ」の古風な地味な暮しに比べて、大野の家では万事が派手であった。たとえばその庭にしても、宮地の家のようにやたらに樹を植えず、斜面を切って道まで張り出した地壇にはただ一面に芝が敷いてあるばかりであった。もと茅場町の証券屋の別宅であったが、持主がこんな田舎でも空襲を怖れて、青梅の方へ引込むところを安く手に入れたのである。

英治は少年時代をしばらく道子と一緒にすごしていた。しかし二人の間にはいわゆる幼馴染の愛情の芽生えさせる余地はなかった。明るく屈託のない英治の性分には道子は少し陰気であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton